見聞記

第25回全国障害者技能競技大会見聞記
―アビリンピック報告―

職業能力開発総合大学校　能力開発研究センター
「技能と技術」誌編集部

全国各地から腕自慢が参加

第25回全国障害者技能競技大会が去る2001年11月10日から12日の３日間にわたり開催された。ここではその競技の模様を報告する。

全国障害者競技大会はアビリンピックの愛称を持ち，広く知られるようになった。アビリンピック（ABILYMPIC）とは，アビリティ（ABILITY，能力）とオリンピック（OLYMPIC）を組み合わせた言葉である。この大会の目的は，障害者がその持てる技能を競い合うことで，彼らがその技能を通して社会に参加することに誇りを持ち，また障害者に対する一般の人々の理解を深め，ひいてはその雇用促進に資することにある。

大会期間３日間のうち，１日目は開会式や競技場の下見が行われ，競技は２日目に実施された。３日目は成績発表，金賞受賞作品発表，閉会式が行われた。

競技日当日は第１会場である障害者職業総合センター（千葉県千葉市美浜区）と第２会場の千葉職業能力開発促進センター（千葉県千葉市稲毛区）に競技会場が分かれていたが，最寄り駅から両会場および会場間には送迎バスが運行され，訪れる者の便宜が図られた。

今回行われた競技種目は計20種目，その参加者人数を競技別に列挙すると次のとおりである。

第１会場

洋裁（４名）/和裁（４名）/DTP（12名）/電子機器組立（７名）/電子回路接続（６名）/電話応対（１名）/ワード・プロセッサー（一般部門）（25名）/ワード・プロセッサ（視覚障害者部門）（６名）/表計算（21名）/データベース（４名）/ホームページ（10名）/紙製品再利用（３チーム，９名）

第２会場

旋盤（５名）/洋服（３名）/家具（４名）/機械製図（３名）/CAD（８名）/義肢（２名）/歯科技工（15名）/縫製（15名）/木工（５名）

参加選手の総勢は169名，北海道から沖縄まで全国各地から集まった。各地の障害者職業訓練施設で訓練に勤しんでいる者，養護学校や障害者施設に所属して生活を送っている者，あるいはすでに企業で働いている者などさまざまである。

競技に対する熱意と集中力

いくつかの競技の模様を報告しよう。

電子回路接続

電子回路接続では「プリント版の組み立て」と「シャーシの組み立て」が競技課題である。６名の選手がその技能を競った。まず材料が支給され，その品名・数量などを確認して競技がスタートした。競技時間は３時間30分。時間を過ぎると作業をストップしなければならない。

競技が始まるとプリント版に抵抗やダイオード，コンデンサなどを付着させるため，はんだごてが動く。シャーシの組み立てに移っても，動作の機敏さは変わらない。ドライバをはじめ多くの作業工具を必要に応じて使い分け，手際がいい。選手たちは，材料に向かって脇目もふらず，一心不乱に手を動かしていく。終了時間が心配なのか，時間が経つにつれ，選手たちの表情に少しあせりの色が表れ始めたかなと思う間もなく，次々と終了の報告が行われ，

DTP

電子回路接続

電子機器組立

紙製品再利用

洋　裁

あせりが安堵に変わった。そこには競技を最後までやり遂げた満足感がはっきりと見てとれた。

DTP

DTPの競技課題は原稿の指定紙に基づいて，用意されたDTPシステムで支給された課題データを組み上げ，カラープリントすること。試験時間は１時間30分である。競技参加者は12名，６名ずつ２回に分けて競技が行われた。

各自がディスプレイに向かい，DTPソフトを，マウスやキーボードで自在に操る。ディスプレイに向かう姿は真剣そのもので，声１つ聞こえない。タイトルの入力，地紋の貼り付け，テキストデータの配置，表作成，イラストの作成，写真処理と手際よく作業が進んでいく。最後に自分の名前を入力し，指定通りのレイアウトを施してカラープリンターから出力すれば競技は終了である。

選手のなかには，すでに印刷所で働いている者もおり，その手慣れた様子は頼もしい限りだ。

紙製品再利用

ほかの種目がすべて職業技能競技の部に属するのに対して，紙製品再利用は唯一生活余暇技能競技の部に属する競技である。またほかの種目は個人の技能を競うが，この種目では障害者１～２名に健常者１名を加えたメンバーでチームを構成し，チームプレーで競技を行う。参加チームは３チーム，それぞれのチームは同じ障害者施設に所属するメンバーで構成されている。競技課題は市販の牛乳の使用済みの紙パックを利用して，はがきや便せん，あるいは装飾品などの製品を作ること。このなかから何を作るかは各チームに任され，大きさや形状，色彩なども自由である。競技時間は５時間。

健常者のリードのもと，障害者たちもかいがいしく動く。紙をバケツの水に浸したり，水をきったり，アイロンをかけたりと忙しい。競技は午前９時30分から昼休みをはさんで15時30分までの長丁場だ。その長い時間の間，参加者たちが必死で競技に取り組む熱意が見学者にも伝わってくる。作業が終わりに近づくと，これまでの緊張が少しゆるんでくるのがわかる。しかし，最後まで気を抜かないぞとの姿は，彼らの意気込みを示すものであろう。

第１会場では障害者能力開発展がロビーを利用して開かれ，全国各地のリハビリテーション施設の紹介や訓練生たちの作品が展示された。いずれの会場でも障害者たちが作業実演する喫茶コーナーが設けられ，また障害者施設で作ったクッキーなどの展示・販売も催された。

障害者への理解を深めるために

全国障害者技能競技大会は選手はもちろん，その見学者たちにも有意義な大会であることを改めて認識した。もし，障害者たちの技術や技能，あるいは自らの仕事に取り組む姿に接したいということであれば，ぜひ，次の大会（平成14年10月に熊本県で開催予定）を見学してほしい。障害者たちへの理解をいっそう深めるにちがいない。